

審査の結果の要旨

論文提出者氏名

富沢 壽勇

本論文は、論文提出者の1981年以来約20年間にわたる文献研究とフィールドワーク(1981年3月-1983年3月、1986年3月、1994年8-10月、1997年9月、1998年8-9月)に基づいて、現代マレーシア国家における王権の位置と役割を、マレー半島西部のヌグリ・スンビラン州の王権儀礼の詳細な民族誌記述と分析を通して、人類学の視点から明らかにしたものである。近年の人類学の先行研究をふまえて、国家や権力の問題に儀礼という視点から接近したところに本論文の大きな特徴がある。

本論文は、以下のように要約される。序論では、人類学における儀礼研究、とりわけ儀礼を通して国家に接近する一連の先行研究が検討され、本研究の理論的な立場が示される。これに続く本論は、以下の3部から構成されている。

第I部は、ヌグリ・スンビランの王権儀礼を取り上げるための予備的考察である。第1章では、「マレー(ムラユ)」という概念がマレー王権の歴史的・認識論的な問題との関連において検討される。第2章では、マレー社会における共同体理念に関する先行研究が吟味され、そのなかで王権(クラジャアン)が位置づけられる。第3章では、東南アジアの伝統国家のなかでのマレー王権の位置づけが行われている。

第II部は、本論の中心をなし、ここではヌグリ・スンビラン王権の細密な民族誌的記述と分析が展開されている。第4章では、王権神話が取り上げられ、王権の正統化を導く政治的思考の特徴が解析される。第5章では、王権儀礼、とりわけ王の即位儀礼に焦点が合わせられ、王権の鍵概念であるダウラット観念の性格が検討される。さらに、即位儀礼の通時的分析から、時代状況に応じて微妙に重心をシフトさせつつ、演出される国家像が明らかにされる。第6章では、王権のイデオロギーを保持するための象徴装置と考えられる拝謁儀礼と叙勲儀礼の現代的意味が究明されている。

第III部は、今日のマレーシア国家における王権の現代的意味についての考察である。第7章では、独立後のマレーシアにおける国家の意匠を創出する過程で、マレー半島各地のさまざまな地方慣行や文化伝統が汲み上げられ、採用されることによって、その正統性の基盤が与えられる一方で、国際的な象徴・儀礼装置も導入されたことが解明されている。第8章では、国王の葬送儀礼と就任・即位儀礼過程の考察を通して、ヌグリ(州、王国、あるいは地方)とヌガラ(連邦国家、あるいは中央)の関係が検討され、一見調和的な儀礼の背後に、国王側の王権イデオロギーと連邦首相側の近代主義的・国民主権の姿勢の乖離がみられることが論じられる。第9章では、現

代マレーシアのブミプトラ政策の政治・文化的背景が、ヌグリ・スンビランにみられるような先住民概念と王権との関係構築の論理から解析されている。

終章では、本論の議論が要約され、マレーシアにおける王権の今後の可能性が示唆されている。

本論文は以上のような内容をもつが、本論文の学問的貢献は、次の2点にまとめることができよう。

第1に、現代マレーシアに存続している王制の儀礼主義的特徴が、過去の歴史的形成過程をふまえたヌグリ・スンビランの王権儀礼を詳しく検討することを通して具体的に解明されている。その際、先行研究ではあまり注目されてこなかった、ヌグリ・スンビランの王族の一人トゥンク・ブサル・ブルハヌッディン（1961年に83歳で他界）が残したヌグリ・スンビラン王権神話の資料をマレーシア国立公文書館から掘り起こし、王権分析の基本テキストの一つとして取り上げた点はきわめてオリジナルであり、マレーシア国家と王制のかかわり、さらに現代において王制のもつ意義という従来のマレーシアの国家研究では十分に明らかにされてこなかった問題を浮き彫りにした点が、卓抜な貢献として評価される。

第2に、今日のマレーシアの国家的な制度が地方的なものを土台にして成立していることが、ヌグリ・スンビラン王権とマレーシア王制との類似的な関係の考察を通して明らかにされている。マレーシアのような複合的な民族・社会構成をもつ国家の場合、地方の伝統と国民国家との接合は現代人類学の重要な課題であるが、王権の儀礼と被統治者の慣習・信念との間の親和性と差違の関係を詳細な民族誌的研究から具体的に実証してみせた点は、大きな功績である。

もともと、審査委員会においては、本論文は王権儀礼の象徴やイデオロギーの分析が中心となっていて、王権の担い手、あるいは王権イデオロギーを支える社会層についての分析が欠如しているため、多様な構成をもつ国民国家の社会動態をむしろ見えにくくしてしまっているのではないかという批判や、マレーシアの王権・王制の貴重な事例についての詳細な記述と分析は十分評価できるとしても、理論的には従来の王権論・儀礼論をあまり越えていないというコメントもあった。しかし、これらの批判やコメントは、長年にわたる地道で着実な研究実績に基づいた本論文の博士論文としての水準の高さを損なうものではなく、申請者の今後の課題としてさらなる研究の発展のなかで答えを出すべきであるという点で一致した。

したがって、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。